

「仕える者になりなさい」

もう 20 年以上前の話で、でも、印象深く思い出に残っている祖母の言葉があります。あんまり良くない方の、印象深さです。私は、通信制高校を卒業しました。しかも、20 年前当時、まだ珍しかったインターネットを活用して、学校に全く通う必要のない通信制高校でした。この高校の理事長と校長が、情報技術に強かったのと、先進的な教育観・・・、と言うより、奇抜で斬新な教育観を好んでいた、と言うのが、この通信制高校設立の原動力だったかと思います。私の父は、私の特性をよく理解し、そういう通信制高校を見つけ出して、私に勧めてくれました。お陰で、今、こうして牧師と園長という尊い働きが与えられているので、そこは感謝しないといけません。一方で、申し訳ないけど、私の祖母は、次のように私の学歴を見ていました。実は、私の出身高校の理事長はリクルート出身の起業家であり、業界多方面に色々なコネクションを持っていました。なので、私の出身高校の賛同者あるいは出資者の中には、結構、知れた大企業も名を連ねていました。父も、私も、そういう高校の属性と言うか、特徴を好んで、この高校を選んだわけではないのですが、祖母は、知られた大企業の名が嬉しくて、ご近所さん達に、「孫は、有名企業と関係のある私立高校に進学した。だから、今は家にいるけど、将来は立派になるんだ」と吹聴して回りました・・・

今、思うと、色々不安を掛けて申し訳ないと謝罪の気持ちが強いです。うちの実家は田舎ですから、高校生が学校に通わずに在宅学習しているということは奇異に見えたことでしょう。祖母自身の理解の仕方という問題ではなく、周辺環境とのお付き合いという文脈において、祖母がある程度のストレスを感じたのは、今となっては申し訳なく思います。ちなみに、祖母ではなく、私の母は、この時、本人の言葉を借りるなら「諦めた、っていうか、仕方がないから流れに任せた」という心境だ

ったらしく、本人に言うとは否定されそうですが「息子の行く末については、委ねの境地」だったと言えます。

私の母の見上げた信仰、もとい流れに任すという心境は、ともかく、祖母が「有名企業の関わり」について吹聴して回っていたという思い出は、今日の聖書箇所にある、ヤコブとヨハネのお母さんの願いと、なんだか繋がっているように思います。孫には、子には、是非とも輝かしい未来が約束されていて欲しい、という。とても純粹であり、間違いなく愛情であり、否定される謂れのない、率直な願いであると私は思います。「有名企業に関係する高校に在学する孫には、是非とも有名企業に就職して欲しい」。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください」。この二つの願いは、非常に親和性の高い、良く似た願いであると思います。そして、自分自身の身の振り方には謙虚であっても、自分の子や孫の将来については、出来るなら華やかに、可能なら立派になって欲しい、と願うのは、これはもう生物的本能に近い感情だと思います。つまり、それは、神様がお造りになった、私たちの本質ですね。だから、否定されたり、拒絶されたりする、そういう願いではないと思います。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が・・・」という願望は、至極当然。むしろ、息子に対しての愛情は、世間体や倫理観を超えて、充分であると言えるでしょう。

ただ、その願望は、イエス様と共にいることで、叶うものではありませんでした。偉くなりたいからと、王座の右と左に陣取るという発想は、少なくとも「あなたがたの間では、そうではない」と言われてしまいます。そういう発想で偉くなる人も、世の中にはいるにはいるが、「あなたがたの間では、そうであってはならない」と。実は、ここに示されているのは、強制や支配ではなく、自発的な選びの問い掛けです。「あなたがたは、どちらに属するのか」という。支配者や偉い人たちが権力を振るうグループか、イエス様に倣って皆に仕え、皆の僕となるグループか。弟子たちは

選ぶことができたし、私たちも選ぶことができます。あなたは、一体、どちらになりたいですか、と。

このイエス様のお話を聞いた、ヤコブとヨハネ、そしてその母、また他の 10 人たちも、少なからず考えを巡らせたかと思います。なんか、思ってたんと違うぞ、と。地上の王様になると約束されたイエス様について行けば、得られるであろう、栄光の形は、どうやらキラキラ輝いた華やかで立派なものではなさそうだな、と。これは、私がよく言うことですが、イエス様の受難の物語は、十字架の現場でローマの百人隊長が「本当に神の子だった」とつぶやく時まで、ずっと人々の一方的な願望と勘違いによって進んでいきました。間違った形で「ユダヤの王」に祭り上げられたイエス様の、その真実が明らかになるにつれ、勝手な願望でイエス様を担いだ人たち自身が、勝手に失望してイエス様に十字架を担がせたのです。イエス様にとって、一体、どこからが受難の物語だったのかと言えば、きっと、今日の聖書箇所のような間違った願望を押し付けられた時から、すでに御受難であったのだと言えます。

だから、私たちも常日頃、イエス様に付き従うことの意味をしっかりと考えていないといけません。キリストを信じるって、どういうことなのか。自分に正しい信仰や正義があるからと、違う信仰に対して拒絶した態度で偉そうに接するのは御心に適っているのか、どうか。いや、イエス様は、すべての人のために十字架につけられたのだから、私たちは、どんな人に対しても、柔和に、仕える者となるのが、きっと正しいのだと言えます。イエス様ご自身も、「仕えられるためではなく、仕えるために」この世界に来られたのだから、私たちも、そのお姿に倣って、謙虚に遜ることを忘れない信仰者でありたいと思います。でなければ、イエス様の御受難は、未だに終えることのない、永劫の苦しみとなってしまいかも知れません。

イエス様の御受難を、とくに心に留めるこの期間。私たちは、イエス様が示された配慮と優しさ、

理解と献身の物語を思い出しながら、自らの言葉と心を整えて参りたいと思います。優しいイエス様だったら、こういう時、どうされるのかなと。困っている人がいたら、偉そうにして正論を並べて諭すのか、それとも一緒に悩んで共に考えるのか。まあ、困りごとの種類にもよりますが、案外そういう時に欲しいのは、正しい理屈よりも、理屈じゃない寄り添いや共感だったりしますよね。塞ぎ込んだ相手に対して上から目線で接するよりも、同じ目線にまで腰を落として親身になって話を聞く方が、ずっと励みになることもあります。「皆に仕える者」という在り方の、一つの具体例は、そういう寄り添いの姿勢かも知れません。

大それたことじゃなく、日常の生活の中で、人々に仕えたイエス様のお姿を想像してみること。それが、私たちの生きる上での道標にもなると思います。そして、重要なことは、そんな主に倣う生活が全うできず、誤って誰かを傷付けたり、失敗したりしても、そんな私たちの過ちを赦し、手当してくれるためにこそ、イエス様は十字架を担われたということです。主の十字架、主の御受難が示す、私たちの相応しい生き方と喜ばしい赦しの物語を知って、今日から始まる1週間も、元気に、そして優しく振る舞うことを心掛けて参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も、私たちをこの礼拝堂へと招いて下さり、ありがとうございます。イエス様に付き従う生き方を学び、私たちにそれが全うできるのか、どうか。不安になることがあります。あなたの示される目標は、とても高く尊く、私たちの日常の姿とは大きく離れているところもあります。しかし、イエス様は、そんな私たちのためにこそ、十字架にかかり、私たちの至らなさや過ちを覆ってくださいました。そのことを受け止め、感謝しつつ、あなたに愛された一人として、少しでもキリストの良き香りを纏うことができますように。隣人や社会に、良き働きを為すことができますように。支え導いてください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

4月誕生者の祝福祈祷

聖書：イザヤ書 46 章 3～4 節

あなたたちは生まれた時から負われ／胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。

神様。暖かい風を感じ、花々の美しさを感じるこの春のひと時、私たちは4月にお生まれになった方々を憶えて祈りを合わせています。あなたは、私たちが生まれる前から、私たちの名を呼び、その人生のいかなる時も、共に歩み、必要な癒しと慰めをいつもお与えくださいました。そして、これから始まる新しい日々においても、あなたのお守りの内に歩んで行ける幸いを感謝致します。4月に生まれた尊い信仰の友人たちの上に、どうかあなたからの豊かな恵みと祝福をお与えください。また、人は独りで生きるのではなく、多くの人たちに支えられ、助けられる中で、その人生を全うしてゆきます。どうか、4月の生まれの方々の周りにいらっしゃるご家族、ご友人をも、あなたが守り導いていてください。あなたの大いなる愛が、すべての人を包み、全き平安で満たされることができますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。